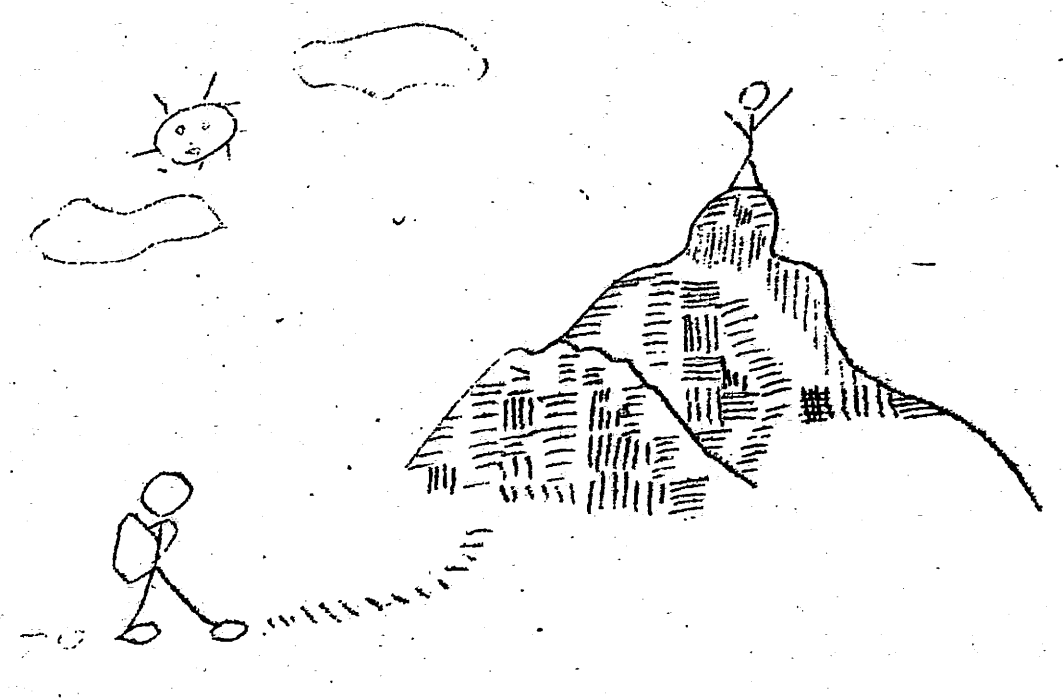


54号

走 總 会 誌 山 岳 部



昭和38年
9月27日
29日

信州大学山岳会
伊那松本山岳部

鋸法縦走

9月21～9月29日

メンバー

し 楽 島 啓 志 (林_女)

川 崎 誠 (林_女)

新 幸 美 (林_女)

板 谷 真 人 (林_男)

平 邦 彦 (畜)

我々は2、3日しか日数を取れないもの同士で、鋸法縦走を試みた。

この山行では、心ゆくまで秋山を、楽しみ、観賞して来た。初日の六合目小屋での夕焼。空一面薄赤くそして真紅に、見とれている間に、それがだんだん薄赤くなり、その夕焼の影と重なってくっきりと、その山の端を見せていた中央の山頂が、同時に薄闇の中に見失っていった状態は、この山行の最高のものであった。

さて2日であるが5時45分あけてて飯をかきこみ、下宿を飛出す。六時三十分発のバスにギリギリ向かい脚をなでおろす。戸台急は、バスで約1時間で着く、新川崎両氏はここで

同じ釜のニギリ飯を、ツケモノをそのままながら食らう。

8時に出発、河原に出ると、砂防ダム築設により砂石が堆石して非常に勾配が緩るくなっているのに驚いた。

さらに進んで、昨年築設中であつた幕岩直下の砂防えん堤が出来上がっており、8割近くも、すでに堆石しているのを見て、自然の力の偉大さに、いまさらながら驚かされた。

さらに進むにつれて兩岸の紅葉が既えてくるようになり紅葉は赤屋根の山小屋に化け我々を惑わした。10時25分丹波小屋に着き、ここで少し早いが昼食にする。乾パンにリンゴである。汗をふきながらかじるリンゴは口の中で、あまずっぱくとろけ、疲れを吹き飛ばしてくれた。

ゆっくり疲れを癒やした後、我々は尻を上げ、戸台川本谷に向つて歩み始めた。本谷と六畳目小屋への分岐地点は、戸台から丹波小屋迄のような単純な河原とは異なり

乾ゆききつた岩、コケに被われぬ樹林、進むにつれて勾配がきつくなり河原から沢へと、変化は富んでいる。

まき道の樹林帯から割合広くなった所に出る。ここが、七丈の滝沢が入り込んでいり、ここからの七丈の滝

は、鬼の顔から沢がこぼれるように、我々がよりつけない face が

細く、長く、清い水を流がしている

この滝も顔に似ずなかなかデリカシーようである。七丈の滝を後に10分を行くと六角目小屋への登路となり分岐点に着き本谷ともおわけ水である。

この登路は平均傾斜35°以上もあるうかと思われるゴシイタイ登りである。20分も登ると屋根すじに出る。ココからの七丈の滝は、さきほどと打って変わり、真正面に数10mもある落差を我々に見せつけ、おどろかかってくる。歩みは遅くとして進まない。「松高屋根とどうだろう？」こちらの方が少しきついな、という異知が染みよくなる。涙水が入る眼にも紅葉が緑の針葉樹とコントラストして、その美しさが疲れた眼をなぐさめてくれたのは、この登りのゴシイさをいくらか代わらげてくれた。バテタ我が身をむち打ちながら急な針面を登りきると急に眠の前が南打駒、鋸岳の稜線に出たときは誠にうれしかった。ここから少し駒側に行った所が六角目小屋がある。小屋には先客が一人来ていた。

夕食後小屋を出ると、空一面赤く染まり夕景に照らされた南アルプス、中央アルプスの山々が我々の目に飛び込んできた。この大自然の美しさは、小キミをうつ我が身を、ほすかしがらせた。

9月28日

快晴である。朝日も青に受けて我々は7時30分、男と金兵衛、オニ高尾を目でして小屋を出た。しばらくすると鳥帽子岳との分岐長三ヶ頭に出る。ここから態々沢の頭の中腹をトラバースして、中ノ川乗越までは倒木地帯で、3年前にくらべて少なかり以外に簡単に通過することが出来た。乗越から急坂がラ場を登り態々沢が^側直に落ち込んでいる稜線に出るとすぐオニ高尾である。ここからのオニ高尾は、すぐ手のとどく近かたに、茶碗をかぶせたような頭をみせている。ここでリンゴをかじりながら写真を撮る。フアにダーガラのどく諸氏のかっこうというものは、古の^く食そのままである。もう少しましなかっこうは出来ないものであろうか？ これでは、すみきった青空の下の汚き知らない御出は怒りも出来ないで泣いていることだろう。オニ高尾から信州側の尾根を、風穴への登路が真正面に見える地帯まで下り、ここからまっすぐに沢まで下る。ここは非常に狭く、いまでも頭上から落石が来そうな、暗い陰気な所である。急な斜面をしばらく登ると、オニ高尾に登る。これを登り切った所が直径1mの風穴である。この穴にキスリングが引掛り、ヒューヒューって出ると、急に明るくなり甲州側が眼の前に南ける。ここからトラバースして稜線に出ると、小キヤップの上である。

我々がオニ高尾で休んでいた時、オニ高尾で騒いでいた
パーティが、小キヤツゴを、さようど下っている所であ
った。小キヤツゴの上で、約20分待つ。

小キヤツゴは裏面に近いが、ホールド、スタニスガしっ
りしているので、ザイルは使用しなかった。ここから15分
ばかりで頂上に着く、11時35分である。

オニ高尾から見たオニ高尾は近いように見えるが、以外に
距離があり、見た目よりもはるかに時間が掛る。

鑓岳の縦走は中ノ川来越から、オニ高尾までが、鑓岳の特
徴を最も良く表すやし、岩場に対する、バランス、トレウ
ニニグに絶好の場所のように思われる。

12時15分オニ高尾を後にし、三角尾ロークを越えてオニ高
横岳まで樹林をぬっての急な下りが続き足音がクガクとい
わさせられる。

横岳時は針葉樹にかこまれたコルで、鑓岳の稜線とは全く
異なり、高鳴っていた代に安らぎを与え、静かな、落ちっ
いた空気が満ちていた。

水が近くにあれば、最高のテント地となるであろうが、鑓
無川に時が30分も下れば水が無いのが欠点である。

川崎、坂谷、酒氏の御足労で我々は、この静な横岳峠に一夜をかまえることが出来た。



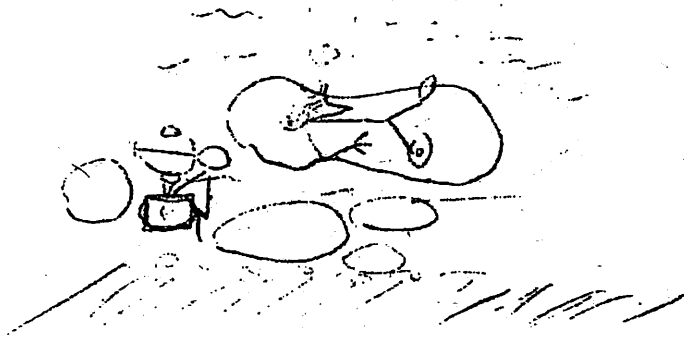
29日
横岳峠に朝が来た。

露が草木を、しっとりとしめらせ、何か我々の心に潤をきえゆつた。満足感、我々の酔った。

しっとりとした柔い苔葉や草の下に朝食をゆつくりと賞味した後、ユルから真下へ、況ずたいに下る、この沢は、寝木小屋沢石俣ともいうべき沢で、左俣との分岐点より少し上流より山腹をトラバースして角兵衛沢に入り、ノボッチで宇台川まで下る。

宇台川では、ラジューズを出して最後の調理を楽しむ。

この山守甲ずつと我々を見守ってくれている太陽が毒雲にさえぎられるようになり、岩板に寝をいって、日光浴をしている我々を息立てはじめたので、我々は是らわず帰路に着いた。明日からは天気をくずれ始めるだろう。



○行動記録
9月27日

入年(心) 6時30分 → 戸台 7時35分, 出 7時55分 → 所訪之
境休 8時55分~9時10分 → 角兵衛屋入口, 休 9時45分~9時55分
分 → 丹波小屋 10時25分~10時55分 → 六合目小屋 (喜目) 11時
12時5分 → 二合目 12時30分~12時40分 → 三合目 12時55分
分~1時 → 1時25分~1時35分 → 休 2時45分 → 3時15分 六合

目小屋

9月28日

六合目小屋 出 7時30分 → 中川栗越 8時50分~9時5分 →
才二高真 9時55分~10時8分 → 小ギヤツ 11時~11時20分 →
才一高真 11時35分~12時15分 → 三角長 12時~1時10分
→ 横基 1時20分

9月29日

横基出 8時 → 角兵衛屋 9時~9時10分 → 六合川 9時55分
~12時30分 → 戸台バス停 1時10分。

・設備用具 (平)
 テント (袋は計)
 ニート

/
/

・炊事用具 (加人)
 コップ 2個
 食器 10個
 はし 6人分
 オタマシ 1
 ミヤマモジ 1
 布バケツ (奥島) 1
 ラジユース (川崎新) 2
 石 2個

2個
10個
6人分
1
1
1
2
2個

○登はん用具
 ガイル (麻) 40mm
 シュリニゲ
 トンカ子
 ハーイン
 カラビナ
 ○その他
 赤布
 メタ
 マッチ、ローソク
 ナタ
 ラジオ
 天気図用紙
 医療用品

1本
2
2
6
3個

食料

謝...川崎Aの食料取扱を奥島が失い書けなかつたこと
 かなりにお詫び致します。